
ヘヴンズ・セブンス

氷上霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘヴンズ・セブンス

【NZコード】

N1774B

【作者名】

氷上霧

【あらすじ】

まだこの世に神や悪魔が姿を見せた時代。人々は力を求め、ただただ目先の欲を満たすために生きる。荒廃したこの世に少年は何を見、何を想い生きるのか。隠された真理を求める少年のミステリー ロマンファンタジーアクション！

～プロローグ～（前書き）

ヘタレの三門小説ですが最後までお付き合い頂ければ光栄です。それではヘヴンズ・セブンス、どうぞお楽しみください！

♪プロローグ♪

紅き月昇りし黒雲の夜

闇天に座すは煉獄の霸者

猛き一声は天を切り裂き

纏う業火は大地を喰らう

千の砦は土へと還り

万の兵士は灰塵と化す

穿たれしは数刻の悪夢

語り継がれしは永年の伝説

古の詩人

シモン＝ストライフ

～日常～

「泥棒——つ！」

肥えたパン屋の主人が罵声を上げる。その叫びに弾かれるように勢いよく店から飛び出す人影。

影は大きな袋を抱えて人混みを擦り抜ける。慌てて追い掛けるがもう遅い。一陣の風は何者にも止められはしない。風は人の目を擦り抜け暗い路地へと飛び込んだ。

周りに人の目がないことを確認すると、影はポツカリと口を開いた穴へと吸い込まれていった。ガリガリと鉄の蓋が穴を塞ぐと、何事もなかつたかのように街は元の流れを取り戻した。

汚物で汚れた下水が運ぶむせ返るような腐敗臭。光すら届かぬ鼠たちの巣窟でうごめく人影。

暗闇に閉ざされたこの地下でほのかに燈るアルコールランプに照らされながら、盗んだパンに食らいつくのはまだ若い紅髪の少年。

ロジャー＝サイクス。15歳。十年前の大戦により孤児に。身寄りがないため、院に収容されるも施設を飛び出す。以来盜みを働いては一日をかいくぐつての地下での生活に落ち着く。

食事を終えると手作りの寝床に着く。明かりがなければ自分の足元すら見えない暗闇で、ロジャーは見えもしない天井を見つめた。

施設に居れば少なくとも寝床と食事にはありつける。だがそれだけなのだ。自由がなければ希望もない。いや、少なくとも誰しもが希望を抱いて施設を訪れるのだ。希望を捨て、夢を見なくなるのは施設に入つてからだ。

施設の院長は力無き子どもたちを食い物にしては私腹を肥やし、用が済めば金を受け取り売り払う。一度買われたら最後、一生金持ちどものオモチャにされるか過酷な労働を強いられるか。

例えそのせいで死ぬことになろうが、誰が咎めるだろうか。棄てられ、クズと追いやられた子どもに誰が涙を流すだろうか。戦争に負けたこの国で、思いやりなどという甘い感情をもつ余裕は誰にも在りはしなかつた。

それは自分も同じだ。自分の行く末を知り、仲間を捨て一人逃げ出したのだ。いくら言い訳をしたところで、本心は自分が一番よく知っている。

自分の未来はこの暗い地下とよく似ていた。仮にこのまま生き長らえたとしても人並みの幸せを手に入れることなど出来るのだろうか。

瞼を閉じても暗闇しか見えない。絶望と屈辱に塗れた少年は静かに眠りに着く。次に目覚めた時は温かいベッドの上だ。そんな幻想を抱きながらロジャーは深い眠りへと吸い込まれて行つた。一筋の雪を頬に残して。

（涙）

・・

声が聞こえる。猛るよつな怒鳴り声が。何だ？何を言つてゐる。聞こえない。

オ・・・・・き・・・・・・・?・!・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

わからない。聞こえない。すぐ頭上から聞こえて來てるはずなのに、その声はノイズ混じりの電波のように遠く震んでいた。

声に反応して体が動く。いや、動こうとするがまるで自分の身体ではないかのように、指先一つ動かない。まるで重い鎖に絡め取られたかのように。

必死にその見えない鎖から抜け出そつとあがくが全く体は動かない。ただ雑音にも似た叫びだけが響き渡る。

と、突然体がフワリと浮いたかと思うと次の瞬間、何か硬いものが背中にブチ当たり、衝撃が体中を駆け巡る。だが不思議と痛みはなく、衝撃が治まればまた体は動かなくなつた。

（なんだよこれ。何言つてんだ？聞こえねえよ。何で俺の体は動かない？どうなつちまつてるんだ？俺はどうなつたんだよ・・・・・・！）

暗く、カビ臭い裏通り。日は当たらず、地面はひんやりと冷氣を帯び、ジメジメした壁の隅をネズミが走る。ガシンと鈍い音がした

かとおもうと深紅の鮮血が辺り一面に飛び散り、耳をつさざくよつ
な罵声が狭い路地に木靈する。

「オラア！何か言えやコルア！勝手にくたばつてんじやねえぞ！詫
びはまどりした詫びはあ！」

眉間にシワを寄せ、こめかみに血管を浮き上がらせ男が怒鳴る。
長く伸びた右腕が掴んでいるのは、生氣を失い、血にまみれた少年
の胸倉だった。

掴んだ胸元を引き寄せると、血に濡れた少年の額に男の額が押し
付けられた。怒りに任せた滑稽な阿保面がぼんやりと、そして次第
にはつきりしていく。男の顔がはつきりと眼に映ると、少年は自分
の身に起きた事態をようやく理解した。

「やうだ・・・・・確か古い骨董屋に盗みに入つて・・・・それで・
・・・・

それでこの有様だ。情けない。思えば“契約者”を相手にしたの
が運のぬきだった。

現状を理解すると少年の腕がピクリと動く。震えながらもゆっく
りと持ち上げられた右腕が男の手首を掴む。震える拳にもはや握力
はない。残された氣力は言葉となつて男に食らいつく。

「・・・・どうした・・・・・もつ終わりかよ・・・・掛かつて来いよ・
・・・・ブタ野郎・・・・

男の拳が横つ面にめり込む。折れんばかりに首が曲がり、衣服が
さらに赤く染まる。吹き飛ばされた少年は力なく壁にもたれかかる

と、ズルズルと腰を落とす。

持ち前の強がりも一言足りとも出でては来ない。もう意識を保つので精一杯だ。その意識もたった今、男の手によつて焼き消されようとしていた。

「もういいや。面倒臭え。“いらねえ”よお前。燃えて失くなつちまえ」

男が少年の頭をわしづかみにすると、右腕の入れ墨が暗く光り始めた。紫に輝くその刻印が突然男の腕を離れたかとおもうと、一塊の羅列となつて腕の周りを回り始める。

「あばよ糞力キ。ママによろしくな」

男の腕がゆっくりと熱を持つ。鉄板のように赤熱する右腕が少年の額に灼けつく。腕はさらに温度を上げ、ついに発火しようとしたその時、男の体が横に吹き飛んだ。

間一髪けし炭を免れた少年は驚いて虚なその眼を頭上の人影へと向けた。

跳ねた茶色い癖毛、キラリと輝く丸眼鏡にねじり鉢巻き、“大漁”と描かれた青い着物と前掛け、握られた鮮魚……

(魚屋さん・・・?)

呆気に取られる少年にオッサン口調の魚屋さん(?)が優しく語りかける。

「大丈夫か少年。今すぐ病院に連れて行つてやるからな」

白く輝く歯を煌めかせて青年がニッコリ笑う。と、突如襲い掛かつてきた火の玉が青年を血で汚れた壁に叩きつけた。石壁がガラガラと焼け崩れる。

まづい、今のはでかい！下手すれば死に兼ねないサイズだ。青臭い正義が余程気に食わなかつたのか、男が歡喜に打ち震える。

ガラリ・・・

男の表情が一変する。爆炎と砂煙の影からゆつくりと青年が姿を現す。馬鹿な！いくら最下級と言えど仮にも“契約者”の全力だぞ？！無傷なんて有り得ない！

クイと眼鏡をかけ直すと落とした魚を拾い上げる。火傷どころか擦り傷一つない青年の顔を見て男が恐怖する。

ベチン！

男が吹つ飛び仰向けに倒れ込む。すかさずマウントポジションを取ると青年は鮮魚を振りかざした。

「おーまーえーはー子供ー相手ーにーなにーをーしてんーだつー！」

ベチン！バチン！と重厚な鈍い音が響く。男の顔がみるみる腫れ上がり、魚のぬめりで顔面がテカる。次第にびくびくしていた男の手足が動かなくなつた。魚屋さんはまだ不満そうな顔で立ち上がるボロボロになつた少年に駆け寄つた。

酷い有様だ。火傷に打撲、打ち身による出血に骨折。左目に到つてはパンパンに腫れ上がり目も開けられない。

「おい！大丈夫か！？」

「コクリと頷くがいまいち意識がはつきりしない。まだ目の前の光景が理解できないのだ。男の手が少年を優しく包む。

「つたく！馬鹿かお前！契約者相手に丸裸で喧嘩売るなんざ聞いたことねえぞ！危うく死ぬところだつたんだぞお前！」

ブツクサ文句を垂れながらも一心に手当てに臨む。

何やつてんだこの人。助ける相手が違うだろ。俺は盗みをしてトチつただけだ。被害者はそこでのびてるオッサンだろ？

理解し難い現実に戸惑う。今まで自らの意思で自分に触れようとした人間なんていなかつたから……。さ迷う視線が男を捉らえる。熱心に自分を介護する男の目に嘘偽りなんてものは微塵も感じられない。

何故？どうして助けるの？ワカラナイ……なぜ……？何故・
・？ナゼ・・？

突然の出来事に心が着いていかない。考えれば考える程男の腹の内を読もうとしてしまう。

どうせ／また／どうじて／裏切られる／こいつも／助ける／偽善者め／使われる／やめろ／信じるな／嘘だ・・・！

握る拳が熱を帯びる。心が悲鳴を上げ、脳内で罵声が轟く。信じるな！男の腕を振り解こうと力を籠めると男が呟いた。

「……辛かつたよな」

男の頬を零が伝う。それと同時に全身の力が抜ける。わけわからぬえ。なんでアンタが泣いてんだ？

この男が何を考えて俺を助けたのかはわからない。何を想つて涙を流しているのかもわからない。そして何故俺の目から涙が零れてくるのか。

男の泣き顔を引き金に十数年の感情が涙となつて弾けた。柄にもなく声に出して泣きじゃくる。恥ずかしい事この上ない。必死に涙を隠そうとしたけれど、溢れる涙を止める術を俺は知らなかつた。

～温もり～

窓から吹き抜ける潮風が鼻をくすぐり、髪を優しくなでる。ふわふわと膨らんでは、パタパタとはためくカーテンの擦れる音に目を開けると、洗いたてのシーツの匂い臭いがした。

(二二)は・・・・・

知らぬ間に見覚えのない場所に寝かされているのだ、戸惑うのも無理はない。状況を整理しようと記憶を遡るが頭痛のせいか、なかなか場面が繋がらない。

(たしか俺・・・・・)

蘇る記憶に溜め息を漏らす。あの不様な失態が夢ではないと動かない四肢が物語る。情けねえ。見たくもない現実に再び深い溜め息をつく。と、ガラリとドアの開く音がしたかと思いつと竹編みの籠を持った男が姿を現した。

「やあ、今お目覚めかい?」

見覚えのある癖毛の男が一ツコリと微笑んだ。

「あなたは・・・・・」

名も知らぬ恩人は思い出したかのように自己紹介をした。

「ああ。僕かい?僕あテオ。テオ=ジャックハウンド。君は?」

「・・・・・ロジジャー」

愛想なくロジジャーがボソリと答えた。明るく陽気な男の振る舞いは沈んだ心をより深みに引きずりこむ。男は竹籠の中からリング「」を一つ取り出すと早速ナイフを片手に皮を剥き始めた。

「いやあ～危ないところだつたなあ。怪我の容態を考えたら無事とは言えないけどさ、命に別状はなくてなによりだ。

あ、僕は先月この街に着いたんだけどね、なかなかいい所だよね。活氣はあるし港は綺麗だし。それになにより子供が

「帰れ」

男の手がピタリと止まる。悲しげな遠い眼差しでロジジャーの顔を見つめる。まるで心の奥底の真意を確かめるよ。

「帰れ。助けてくれたことは感謝する。だけば余計なお世話だ。
帰れ」

男の顔に笑みが戻ったかと思つと再びリンクの皮剥きに取り掛かつた。邪険にされたことを氣にも留めていないかのようなその態度が余計苛つく。

「連れないので。せつかく出会つたんだからもつと仲良くなつよ。ここ来て日が浅いからか、まだ友達いないんだよな」

「何が目的だ？身寄りのないガキ手なずけてどうしようつてんだ？
てめえに助けを求めた覚えねえぞ！」

ギラギラした目を真つ直ぐ向けてきつぱつと吐き捨てる。何者も

寄せ付けないような凜とした眼差しに男は肩を落とした。

「別にそんなじやないさ・・・・・。ただ助けたかった。それだけさ。それとも何かい？人を助けるのに理由がいるのかい？」

さつきまでのふわふわした態度こそ失せたが男の目も真剣で、嘘偽りなど微塵も感じられない。だがロジヤーは相変わらず冷たい言葉をテオに投げ掛けた。

「要るね。新参者だか知らねえが利益なしには誰も動かない。ここはそういう所で、そんな奴らの溜まり場だ。あんたが知つてるのは上っ面の綺麗な部分さ。だからアンタは信用出来ない。これ以上借りを作るなんてまっぴらだ。だから帰れ。今すぐに」

これ以上は何を言つても無駄だと悟つたのか、剥き終えたリンゴを切り分けて皿に乗せると、男は何も言わずに立ち上がった。

男が部屋を立ち去るのを見届けると、一気に肩の力が抜ける。はあ、と一息つくと再び天井を仰いだ。

「情けねえ・・・・・」

この怪我もしそうだが、何より助けられたという事がロジヤーの心を暗い淀みの中に蹴り込んだ。きっとあの男の善意は本物だつたのだろう。だが、この街で生きる以上信頼や友情こそが最も恐るべきものであり、不要なものだ。ましてこの鍍金で塗り固められたこの街で人を信じるなど命を明け渡すようなものだ。

大人たちの薄汚い素顔を少年はよく知っていた。そして一度甘い言葉に乗つてしまえばどうなるか。信じれば最期。非道にならなければ

れば生きてはいけない。そう胸に誓っていたはずなのに・・・

堅牢な意志が揺らぐ。人に触れるなど何年ぶりだろう。男の温もりが、忘れていた温もりが甦る。

信じてみたい。あの眼差しを。触れていたい。あの温もりに。その眩しそぎる現実が、例え叶うことのない幻想だとしても・・・。

ふと窓の外を覗くと紅の帯を携えて、金色の陽が地平線の彼方に沈まんとしていた。対の空には月が淡い光を放ちながら闇夜に座す。冷たくも温もりに満ちたその光に思わず笑みを零した。

「久しぶりだな、ベッドで寝るなんて」

皮肉混じりの感謝を月に重ねた男の影へと向ける。

その夜、ロジャーは記憶から失せた両親の温もりを抱いて寝床へと着いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1774b/>

ヘンズ・セブンス

2011年1月27日14時46分発行